

豪商志摩利右衛門とその時代の時代

第24回
企画展

期間

平成14年8月6日[火]
~ 10月27日[日]

場所

徳島県立文書館展示室



 文化の森総合公園
徳島県立文書館

Tokushima
Prefectural Archives
<http://www.archiv.comet.go.jp>

志摩利右衛門とその時代

江戸後期、阿波の産業といえば真っ先に藍と言える。阿波の藍商人には、全国に商圏を持つ巨大な商家がたくさんあった。家としては久次米・三木・西野・井上・松浦などがあげられるが、個人では「志摩利右衛門」の名が良く知られている。

利右衛門が知られているのは、大正時代に、「尊皇攘夷」と関係した政商ということ、積極的な評価が行われたことに由来する。その成果は、大正四年の「従五位」贈位につながり、翌年に徳島の儒学者であった岡本由喜三郎によって編まれた「贈従五位志摩利右衛門」という偉人の伝記書となって残されている。その後、志摩利右衛門の事跡といえば、この伝記がほぼ決定版となっている。

平成五年、現在東京に在住の後藤田扶規子氏から徳島県立文書館に、ご先祖の志摩利右衛門に関する資料が持ち込まれた。その史料群は、写真・画像・所蔵品・俳句等の作品などが中心で、伝記にある事跡を検証することは難しいと思われた。

しかし、資料の整理が進んで行くと、実際に「尊皇攘夷」運動と直接つながりのある頼山陽・頼春水・頼三樹三郎らの資料や中島錫胤の書簡が含まれていることがわかったり、京都を中心に活躍した月並俳諧の宗匠クラスである桜井梅室や、江戸で活躍していた安達一具などとの密接な関わりがわかりました。また、浜口南涯や浦上春琴、

貫名海屋、大原吞舟ら、画家との交流も見えてくる。こうした交流は、京都を中心とした政治・文化的な集まりの存在を示している。

さらに、文書館が所蔵している鳴門市高嶋の篠原家文書には、弘化四年（一八四七）藩の役職である塩方勘定役として実際に活躍していること、確認ができる資料があることがわかった。伝記上の人物であった志摩利右衛門の足跡が生き生きと甦りだしたのである。

志摩利右衛門が生きて活躍した時代は、文化五年（一八〇八）から明治十七年（一八八四）、特に最も脂の乗りきった時代は、幕末から明治維新という激動の時代であった。志摩利右衛門はこの激動の時代の阿波を知るためには欠かすことのできないキーマンの一人といえる。



志摩元年(利右衛門)の書



志摩利右衛門写真



志摩利右衛門画像

いあいさし

徳島県立文書館の入館者は、今年の五月で通算三〇万人を超えることができました。これも、文化の森総合公園の中で文化施設五館が複合するという恵まれた環境と、開館以来当館で切れ目なく実施している年二回の企画展、二回の資料紹介展を続けていることなどが、多くの県民の方々にご理解・ご支援いただいた結果と深く感謝しております。また、こうした展示も、多くの方々から貴重な資料を寄贈・寄託していただいていることがすべての基礎になっています。

今年度最初の企画展も、かなり以前に文書館にお預けいただいていた資料の整理がようやく終わり、皆様にお目にかけてことができるものです。幕末から明治初期にかけて活躍した、阿波の伝説的ともいえる藍商人である志摩利右衛門の実像に迫る展示として、「豪商・志摩利右衛門とその時代」をテーマとしました。

藍は、阿波徳島の藩政時代最も代表的な産物で、

藍商たちの活躍範囲は全国に及んだとされています。元禄・享保期（江戸時代中期）から吉野川流域両岸に藍作地帯が形成され、白壁で囲まれた壮大な構えの藍商屋敷が多く見られるようになり、現在でもその面影を残しています。

志摩利右衛門の家も吉野川中下流域の東覚圓村（現石井町覚円）にあり、いわゆる藍作地帯の中心にありました。若くして藍商として成功した利右衛門は、幕末期の激動の中で、藩の経済に関わり、国家の政治に関わり、深い文化に触れる多彩な一生を送りました。こうした実態の利右衛門を、利右衛門自身を書いたものや、触れたもの、利右衛門が交わった人々が残したものを中心に、わかりやすく解説しながら紹介していきます。

今回の展示にあたり、資料をお預け頂きました後藤田扶規子様、仲介の労を取って頂きました湯浅良幸様、また、数々のご協力をいただきました皆様方には心からお礼を申し上げます。

平成十四年八月六日

徳島県立文書館 館長

佐々木 清克

【志摩家について】

名西郡東覚圓村志摩家は、万治・寛文期より東覚圓村に住居し農業をしていたが、三代目三太郎の時代から商業を営み、島屋利右衛門を代々称した。万五郎の代には藍の製造販売を始め、勢尾各地（伊勢・尾張を中心とした中部地域）に売り場を開いた。その子勘五郎の代にはさらに売り場が拡張し、東覚圓村組頭庄屋を拝命するに至った。勘五郎の子が志摩利右衛門（幼名万蔵）である。

家紋は表紙にあるように三階菱で、利右衛門の画像の羽織にも描かれている。

藩役人としての 利右衛門

塩方と 志摩利右衛門

志摩利右衛門は、天保以降の徳島藩財政改革に深く関わっていたとされるが、その根拠となる原文書はあまり見つかっていない。唯一塩方に関しては、志摩利右衛門の経済官僚としての実像がわかる資料が「篠原家文書」等に残されている。

塩は、徳島においては、藍・木材などに並ぶ大きな産業で、特に鳴門・徳島の「斎田塩」の名は全国に響いていた。志摩利右衛門は藍商であるが、藩の役人として最も活躍した場は塩方であったようである。

志摩利右衛門が残したとされる資料「御用諸事控帳」は、蜂須賀治昭公による郡代制度の導入と塩方代官の廃止という改革以降から天保期に至る塩方の制度・法令等を書き上げたものである。利右衛門はこの資料を作ることによって過去の塩方の流れを知り、塩方の制度改革を進める前提を考えたものと思われる。

天保十一年（一八四〇）徳島藩は下り塩問屋十六名に対して、塩の江戸直送及び江戸藩邸による管理を命じている。藩は塩の流通管理を始めたのである。この動きは、利右衛門もブレイクとなり進めたとされる天保の藩財政改革の一環で行われたものとされている。

弘化二年（一八四四）、徳島藩江戸藩邸内に正式に塩会所が開設されている。同年、利右衛門は塩方勘定役となり、阿波側の濱方（塩浜の代表）・船方（廻船業の代表）を連れて江戸へ向かい、江戸側の元取問屋との交渉に当たり、阿波国の廻船による元取問屋直送の約定書を交わした。その約定書の第一には「国船はすべて手捌（藩の塩会所を通して）に付して販売を行い、他国船もおいおい手捌に付して販売すること」とあり、藩による塩流通統制の強化を見ることが出来る。

この二年後、弘化四年には利右衛門の元で、さらに阿波国船以外の他国船も江戸元取り問屋に直送することを、新たな約定書で定めている。その約定書の第一には「国産塩の積み下しは、今後他国船であってもすべて手捌（藩の塩会所へ）差し向け、元取方において販売をすること」を決めている。

志摩利右衛門 徳島藩役人としての活動

年代	役目	格
文政2年	東覚圓村組頭庄屋	組頭庄屋
天保8年	西覚圓村庄屋兼帯	小高取
天保12年	調達勘定役（藩役人としての仕事振り出し）	中小奉行格
弘化2年	塩方勘定役	
弘化4年	江戸御手捌塩改御用	
弘化6年	塩方御用利役・寝床制道人（藍方）・勤業下調役	
嘉永2年	塩方取締役	原土取扱
嘉永6年	彦根積入塩御用	
安政4年		郷士格
安政6年		中小姓格
文久2年	土佐流木建議を理由に大安寺別荘に蟄居。降格。	小高取
文久3年	国産物調役（復帰）	中小姓格
慶応3年	御国産方	
明治3年	商法方御用掛頭取	大属格

このように藩は、二つの段階を踏んで塩の流通の統制を完成させていった。利右衛門は実際にその交渉の中に入り、この専売制を完成させたのである。こうしたひとつの事実からも利右衛門の経済官僚としての力量を見ることが出来るのではないだろうか。塩の専売制は、明治維新に至るまで続いている。

藩経済官僚としての志摩利右衛門にはたくさん逸話がある。今後はそうした仕事の虚実を資料から明らかにして行くことが必要になるだろう。



利右衛門羽織

志摩利右衛門商業関係年表

文化6 (1809) 年	1才	5月	東覚圓村 (現石井町覚円) に生まれる。
文政2 (1819) 年	11才		父勘五郎が亡くなり、家を嗣ぐ (東覚圓村組頭庄屋となる。叔父利兵衛が後見)。
7 (1824) 年	16才		信州松本 (現長野県松本市) に支店を置く。
9 (1826) 年	18才		羽州米沢 (現山形県米沢市) に支店を置き、奥羽へ藍の販路を広げる。
10 (1827) 年	19才		北越・奥羽をすべて販売地とする。
11 (1828) 年	20才		京都三本木に支店を開く。(頼山陽、水西荘の隣家といわれる。)
12 (1829) 年	21才		京都四条通御旅町に煙草店を開く。
天保3 (1833) 年	24才		加賀米を大阪に移入する。
天保5 (1834) 年	26才		伊勢・尾張外11カ国の売り場を巡視する。
6 (1835) 年	27才		京都及び五畿内の売り場を巡視する。
7 (1836) 年	28才		防長の売り場を巡視する。
嘉永元 (1850) 年	41才		京都・防長・北陸を巡視する。

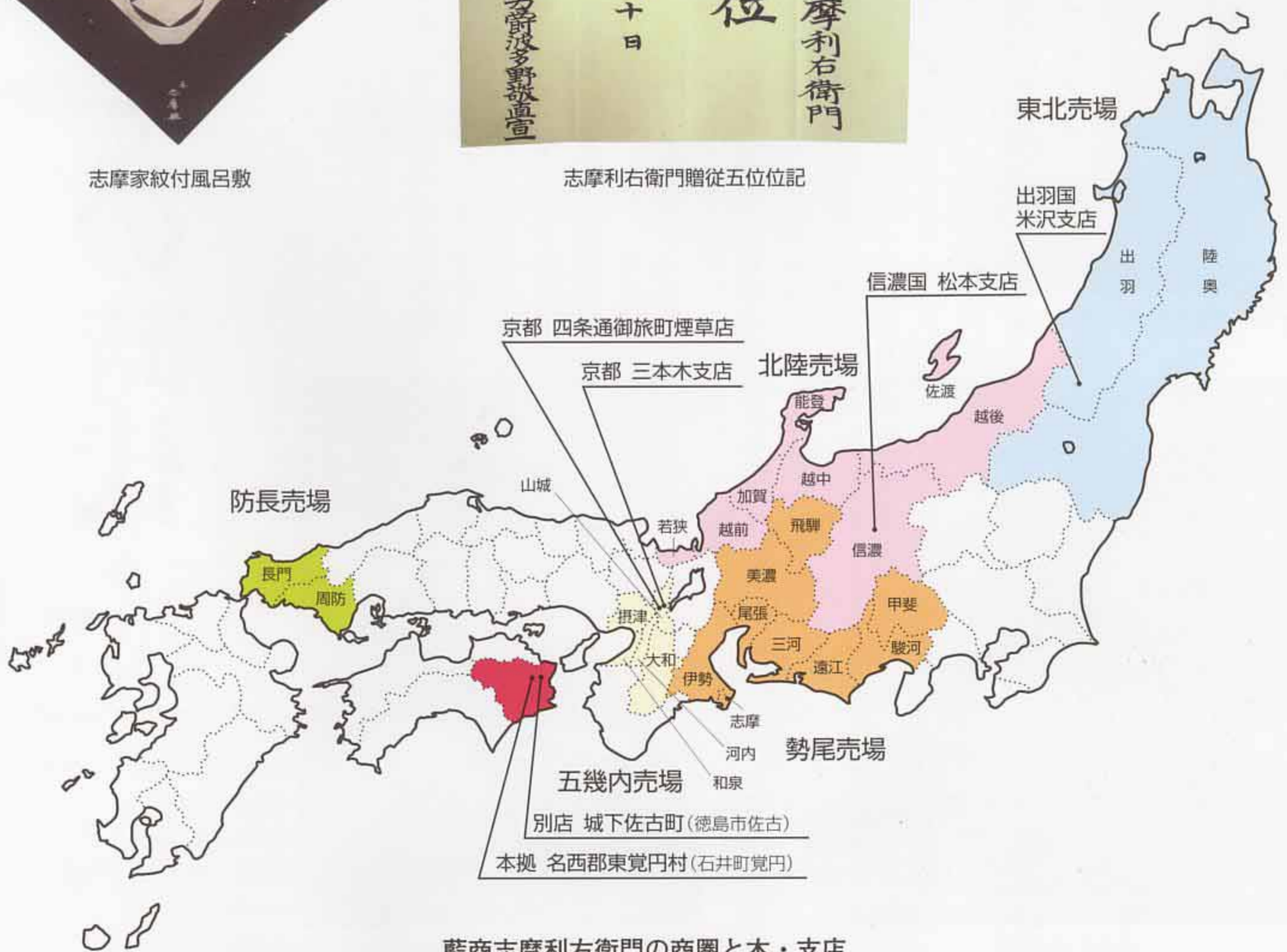
志摩利右衛門 その時代



志摩家紋付風呂敷



志摩利右衛門贈従五位位記



藍商志摩利右衛門の商圈と本・支店

志摩利右衛門と幕末の俳諧師たち

江戸時代学問・文化の中心といえはやばり京都であった。早くから京都に支店を持ち拠点のひとつにしていた利右衛門は、その文化に触れ俳諧を趣味とした。後藤田扶



句 桜井梅室/画 大原吞舟
田植笠の句と画

規子家に残る多くの短冊や軸や書簡や句集がそれを物語る。特に桜井梅室、成田蒼虬、森岱年、安達一具ら京都・江戸の宗匠と密接に関わりがあったように、桜井梅室・岱年を阿波まで伴い帰り、連日俳句を練っていたという。

また、画家の浜口南涯、浦上春琴、大原吞舟、買名海屋らとも交わり、浜口南涯を連れて京都や大阪を遊歴するようなこともあった。利右衛門は、このように極めて広い文化的な交流を持つ人物であった。

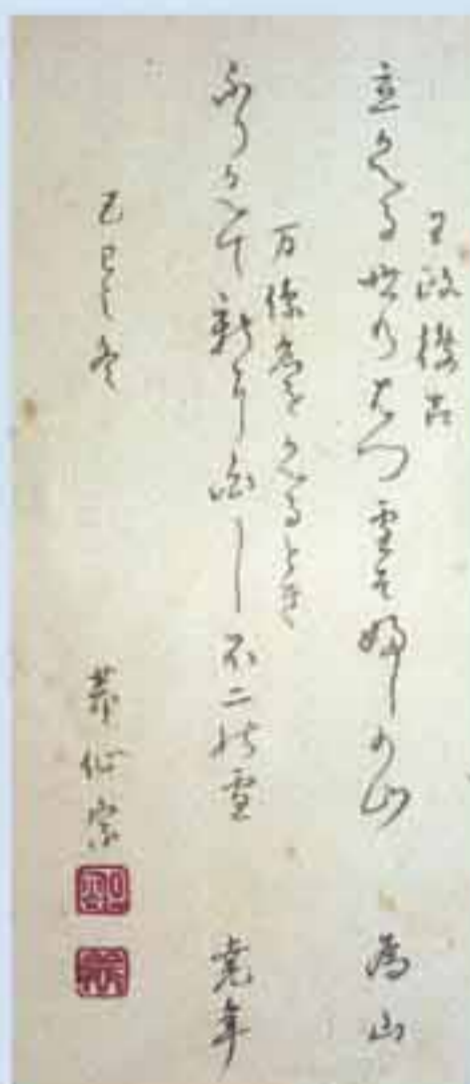
◆利右衛門と交流を持った俳諧師・画家

◆俳諧師	◆生没年	◆出身	◆備考
成田蒼虬(なりたそうきゅう)	宝暦十一年(一七六一) - 天保十三年(一八四二)	加賀国金沢	京都で活躍。天保三大家のひとり。
桜井梅室(さくらいばいしつ)	明和六年(一七六九) - 嘉永五年(一八五二)	加賀国金沢	京都で活躍。天保三大家のひとり。
安達一具(あだちいちく)	天明元年(一七八一) - 嘉永六年(一八五三)	出羽国樺岡	江戸で活躍。幕末期東北家人の代表格。
森岱年(もりたいねん)	寛政十年(一七九八) - 嘉永五年(一八五二)	讃岐国丸亀	京都で活躍。
芹舎(きんしゃ)	文化二年(一八〇五) - 明治二十三年(一八九〇)	山城国八条	蒼虬の門下。
◆画家	◆生没年	◆出身	◆備考
買名海屋(ぬきなかいおく)	安永七年(一七七八) - 文久三年(一八六三)	阿波国	徳島藩土吉井栄蔵の子。南宋画家、書家としても有名。京都・大坂でも活躍。
浦上春琴(うらがみしゅんきん)	安永八年(一七七九) - 弘化三年(一八四六)	備前国	画家浦上玉堂の子。京都で活躍。
浜口南涯(はまぐちなんがい)	享和元年(一八〇一) - 慶応元年(一八六五)	阿波国	徳島市佐古大裏丁(現佐古三番町)浜口御牧の弟。医者でもある。
大原吞舟(おおはらどんしゅう)	? - 安政四年(一八五七)	阿波国?	京都の画家大原吞響の養子。徳島でも多くの作品を残す。

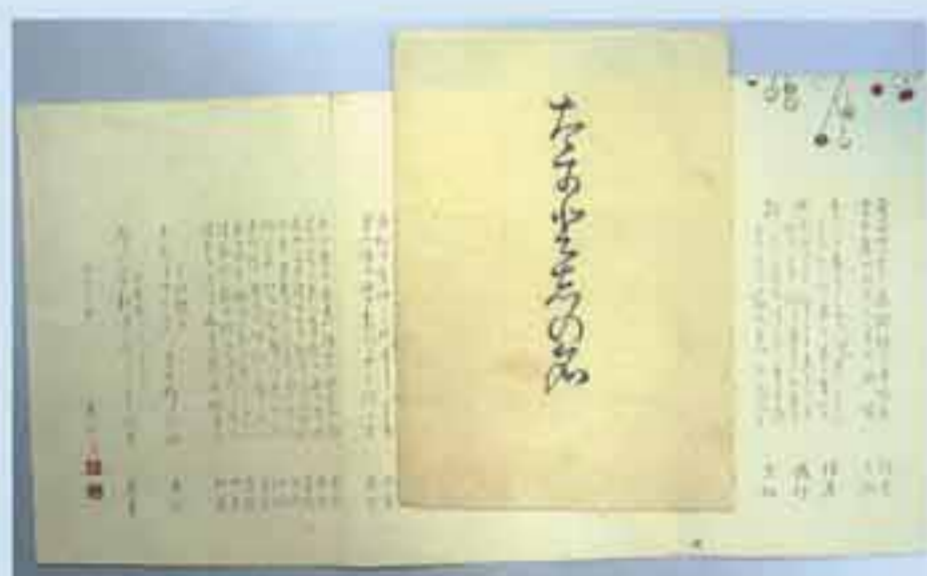
たかとし(堯年)の名

志摩利右衛門は、俳号を万像(まんぞう)というが、これは元々幼名が萬蔵であり、この音をとって俳号としたようである。この俳号の万像の名を変える記念に出した句集が、「たかとしの名」である。句集の作成年は「己巳之冬」とあり明治二年である。この句集の最後の句は、「万像の名を変えるとき」という題が付いており、「ふりかへて 新に白し 不二の雪 堯年」とつづいてる。

堯年のひとつ前の句は「王政復古」という題が付き「立ちかへる 世のはつ雪は ふしの山 為山」としている。この二つの句は、富士山で日本を、白い初雪で新しい世の中を示し、「堯年」への改名とともに明治維新への大きな期待を示していると言えるのではないだろうか。



たかとしの名
堯年の句拡大



たかとしの名

参考文献

- 岡本由喜三郎著『贈従五位志摩利右衛門』1916
- 井上一著『志摩利右衛門』1944
- 鳴門市史編纂委員会編『鳴門市史上巻』1976
- 角川書店編『俳文学大辞典』1995

尊皇攘夷と 志摩利右衛門

利右衛門は、文政十一年（一八二八）、二十才の若さで京都の三本木町に支店を開いた。当時三本木には、当時『日本外史』を著し父頼春水の遺稿をまとめた四十九才働き盛りの頼山陽が築いた水西荘があったが、利右衛門の支店はこの水西荘の隣家であったとされる。このことをきっかけに、頼家との交わりを深めると共に多くの人と交わり尊皇攘夷運動へ足を踏み入れていった。翌年にはさらに京都四条通御旅町に煙草専門の支店を開いている。この店は、尊攘派の集会所となっていたとされている。

安政五年（一八五八）井伊直弼が大老に就任すると、尊攘派への弾圧といえる安政の大獄が始まった。頼山陽の子頼三樹三郎は京都で捕らえられ、投獄され翌年斬刑に処せられた。利右衛門は、この時京都へ入って情勢を探ったり、三樹三郎の死後には尊攘派の同士を慰問したという。

文久三年（一八六三）二月、前年十月攘夷の勅書が下りながら実行に移せない幕府に業を煮やした尊攘派の同士達が、京都等持院で室町將軍足利尊氏らの木像の首をはね吊すという事件を起こした。將軍へのこのような行動は幕府にとっては非常な驚異であり、その探索は激烈であった。事件を起こした人々の中には、



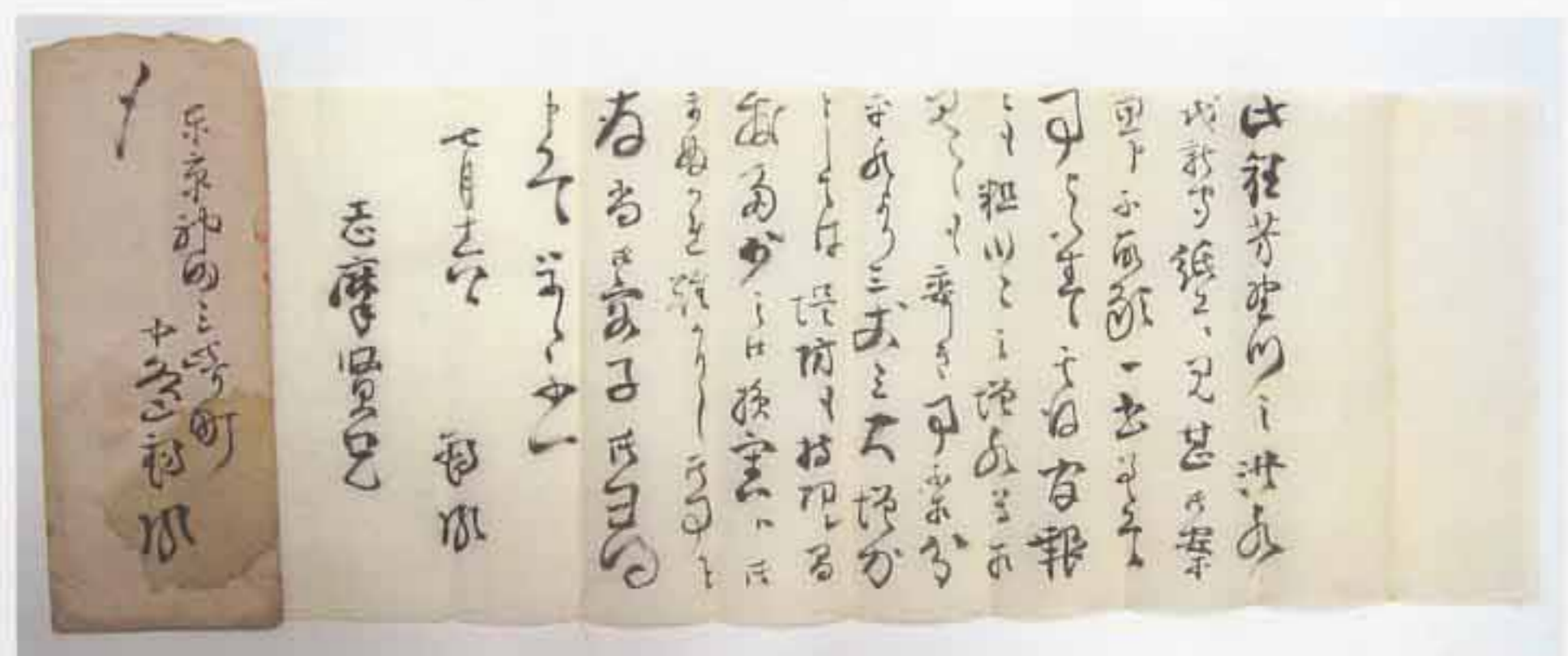
中島錫胤写真

徳島佐古出身の中島錫胤が含まれていた。中島は同土小室信夫とともに京都を脱出し阿波へ逃げ帰り、覚圓村の志摩利右衛門本邸へ逃げ込んだ。利右衛門は、二人をかくまい翌年には佐古の大安寺近くの別邸に移したが、ここで幕吏に捕らえられてしまった。その後二名は明治



頼春水(頼山陽の父)書簡

元年一月まで六年間に渡って幽閉されたが、二名の出獄策を練るなど尊攘派へ寄せた気持ちが変わることはなかったという。また、志摩利右衛門の養子に志摩熹六がいる。熹六は、吉田熹六・岸熹六の名で活躍した徳島の自由民権運動の中心人物の一人であった。熹六は利右衛門養子時代に援助を受けて東京の慶応義塾に行き英語を学ぶが、塾監と衝突し徳島に帰郷した後、利右衛門によって志摩家の米沢支店で商店経



中島錫胤書簡

営を学ばせるが、これも果たせずに帰郷するということを繰り返していた。米沢からの帰郷後は、自由民権運動に身を投じ、志摩家から飛び出して、普通新聞社の主幹となり徳島立憲改進黨の中心人物の一人となっている。利右衛門は、このように尊攘派の志士や自由民権運動に関わる人々など、徳島の明治維新を切り開いた若い才能を育てた人物であったといえるのではないだろうか。



志摩家門（古写真）



佐々木家門（徳島市一宮町）
（覚園にあった志摩家の門を移築したという。）

展示品目録

N0.	標題	年代	備考
志摩家と志摩利右衛門			
1	志摩利右衛門画像（七十歳）	明治期	シマ00018
2	風呂敷（志摩家家紋入り）		
3	志摩利右衛門紋付羽織		
4	志摩利右衛門肖像写真	明治期	シマ00027
5	故志摩利右衛門（位記贈従五位）	大正5年（1916）	シマ00036
6	故志摩利右衛門（贈与状）	大正4年（1915）	シマ00037
7	贈従五位志摩利右衛門（岡本由喜三郎著）	大正5年（1916）	シマ00069
8	翼賛叢書志摩利右衛門（井上一著）		文書館所蔵
9	三ツ盃（堯年古希記念、俳句入り）	明治12年（1879）	
10	（志摩家家相図・家の図面）	明治期	シマ00043
11	群仙の図 右（大原吞舟画）	江戸後期	シマ00007
12	群仙の図 左（大原吞舟画）	江戸後期	シマ00008
13	書（俳句）	明治期	シマ00024
14	（東西覚円村絵図）	明治期	アマ200124
徳島藩財政との格闘			
15	御手捌塩取究并約定書一卷	弘化2年	シマ03579
16	御国産塩御手捌一条并濱方諸願跡書	弘化2年	シマ03568
17	塗物問屋取行方趣法帳	文化8年（1811）	材00312
18	塗物中買名面并国割名面	江戸後期	材00825
尊皇攘夷と志摩利右衛門			
19	名人手束	大正期	シマ00006
20	枕屏風	明治期	シマ00020
21	中島錫胤（書簡）	明治31年（1898）	シマ00050
22	中島錫胤（書簡）	明治32年（1899）	シマ00051
月並俳階と志摩利右衛門			
23	堯年古希賀集（俳句集）	明治11年（1878）	シマ00041
24	たかとしの名	明治2年（1869）	シマ00038
25	豊国堯年翁俳諧集	明治11年（1878）	シマ00039
26	（俳諧短冊帳）	明治期	シマ00060

* 期間中展示品保護のため、入れ替えることがあります

編集・発行 徳島県立文書館
 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
 電話 〇八八（六六八）三七〇〇
 印刷 原田印刷出版株式会社
 〒770-0903 徳島市西大工町四ノ五
 電話 〇八八（六二二）二二二五六

第二十四回 企画展
豪商志摩利右衛門とその時代
 平成十四年八月六日 発行